

# 隼人族の森を渡る風

創造の現場から 第13回

森の彫刻家 上床利秋

## 田吾作に学んだ

11月、寒さが急に増してきたころ、杉アトリ工居候猫の田吾作がまたいなくなつて一週間が経過した。きつと猫の身に何か事件でもあったのかと心配していた矢先の再会は、後ろ脚に大怪我をしてヨタヨタしながらの生還だった。猫同士の喧嘩だろうなと思いつつ、しかしあまりに痛々しかったので、またまた永山動物病院へ。

怪我の様子を診断されて、先生は「野山で畏にかかっちゃったんじゃないかなあ。骨は折れとらんども、傷口がふとかで、完治すつとかどうかはら割くらいじゃとどなあ。」との説明を頂いた。ということとは、帰つてこなかった7日間、ほとんど飲み食いで済みに苦しんでいたことになる。畏にかかった足が完全に切れているわけではないので、多分、畏を仕掛けた人間が解放してくれたのだらう。傷



成年千支テラコッタ「ミニブルちゃん」

口から骨が見えて膿が出ており、ちよつと匂いがしていて破傷風のよくな状態

だった。怪我をしていない足と比べると倍くらいの大きさに腫れていた。もちろん田吾作は言葉などしゃべれないわけだが、この時の「にゃあ」というなき方は弱々しく「いたいよう、いたいよう」と言っているように自分にはどうすることもできず、ただ頭をなでて、気を紛らわしてやるしかなかった。大好物の鶏の生肉も食べようとしなかった。



後ろ足を怪我した田吾作くん

畏というものが人間の仕掛けたものだという事を、猫は理解できるはずもない。突然降り注いだ自分への災難をきつと「ああびつくりした、いたかったよう」と思っているような様子。もし、人間である自分だったら、「一体だれが何のために?」「自分は悪くない。」「この先どうしてくれる。」などと、いろんなことを考え、誰かに恨みを抱くのかも知れない。でも治療後の田吾作の様子を見ていると、にゃあにゃあ泣き叫

ぶこともなく、ストーブのそばの椅子の上でじーっとして痛みをこらえ、半開きの目で佇んでいるばかり。安全な空間で静かに傷を癒そうとしている姿は「その態度は偉い!!」と思わされた。病院から帰ってきたその翌日は、さすがにどこにも行こうとしなかった。相変わらず食欲はなく、水を飲むだけ。

ところが、翌々日、姿を消したのだ。猫は死ぬ前は姿を見せないというが、もしや……と不安な心が私を支配していたのだが、けれどもしばらくして田吾作は三本足で自分のシマを見回っていただけで、前よりも元気に「にゃあ! (ただいま)」と行ってひよこひよこ帰ってきたのだ。

猫の身を案じ、将来を心配し、心が揺れていたのは猫本人でなく、どうも人間サマの自分だった感じがあふ。猫は過ぎた苦しい過去などよくよ考えず(考える頭がなく)、理不尽なことも受け止めて、生きるために精一杯。ヒステリックな動きも見せず、アトリエという住処で、安心して寝ている姿を見ていると、私よりも猫の方が立派な態度のように思えてきた。

「かわいそつに。でも頑張つて生きろよ、田吾作。そして、ありがと。」